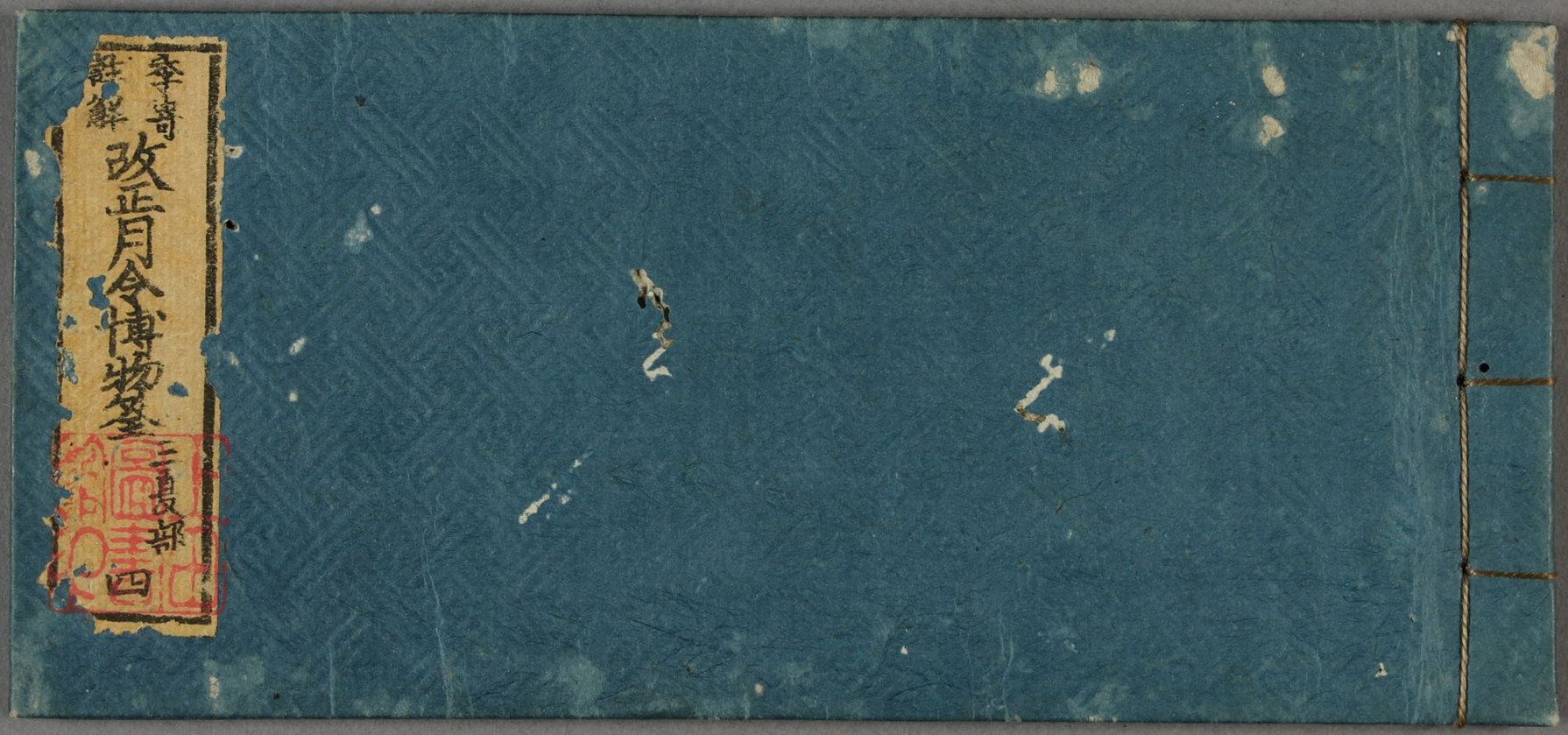

李寄
註解
改正月令博物筌
三長部
四

夏部目録

○夏の天氣○占候○養生法等此部に出

△夏日 二丁
△夏月 夏の霜 二丁
△夏朝 三丁
△夏夜 三丁
△夏野 五丁
△暑し △涼 五丁

夏時令 此部には三月ふるまで時候のうつりめをしるす

△夏暁 三丁
△夏夕 △夏暮 三丁
△夏山 四丁
△夏川 五丁

夏州木 此部には夏三ヶ月のくさ木をしるす

△夏草 五丁
△夏木 △夏木立 △類葉 △日ちの紅葉 六丁
△夏 柳 △柳の糸 六丁
△柳 △柳のり 六丁
△青素椒 七丁
△柚山椒 △蔓椒 七丁

△苅葱 七ウ
△苔草 七ウ
△蓼 七ウ
△根芋 七ウ
△海松 八ウ
△馬歯苋 七ウ
△蕗 七ウ
△藜 七ウ
△蓴菜 七ウ
△水草の花 八ウ

夏生類

此部ハ夏三月ヨリ生ずるものゝ事をあつむ

△蚊 八ウ
△蚊遣火 蚊火 八ウ
△蚊柱 九ウ
△蝿 九ウ
△蛭 九ウ
△蚤 九ウ
△螢 九ウ
△子子 十四ウ
△蝸牛 十四ウ
△皆蝓 十四ウ
△夏鷹 十四ウ
△鷹鳥屋籠 十四ウ
△鵲 十五ウ
△蠅虎 十五ウ
△蠅 十五ウ
△鵜川 鮎釣舟 十九ウ
△青鷺 十六ウ
△通鴨 十六ウ
△鮎 十六ウ
△胡鮒 十六ウ
△水鯰 十六ウ
△水鱧 十六ウ
△干鱧 十七ウ
△干鰕 十七ウ
△洗鱸 十七ウ
△鮒 十七ウ
△鱸鯉 十七ウ
△魚簗 十七ウ
△噎鳥賊 干いか 十七ウ

夏雑

此部ハ夏三月の種々雑事をあつむ

△短夜 明安き夜 十七ウ
△蚊帳 蚊屋 十七ウ
△團扇 十七ウ
△扇 伏翼 十七ウ
△編笠 十九ウ
△日傘 十九ウ
△夏袷 十九ウ
△夏書 夏花
△夏蕎 夏蕎行 十九ウ
△夏断
△安居 十九ウ
△切麥 冷麦 十九ウ
△新麥 十九ウ

△煮冷 △冷汁 支子九丁
麥粉 十九丁
△麥飯 十九丁
△木布 十九丁
△草物 十九丁
△汗衫 十九丁
△汗巾 △汗拭 △汗手拭 十九丁

必用 此部ハ夏三ケ月の入用のこと沢あるべしとなり

夏養生 十九丁
夏天氣 十九丁
夏風 十九丁
夏雲 十九丁
夏霞 十九丁

夏時令

此部ハ夏三月ハ時候の物とあるべし

夏日

為家

題 夫木

庭の面ハ日新しるあり夏の日ふるびくさうのほそをしさ

連 白雲ハ照そへ交ぜ日新ル宗祇

詩 夏日五字對句

九天鑪焰暖 避暑得深幽

六月玉聲寒 忘年遂久留

夏日之詞

明 黄氏

詩

深院塵消散 午炎篆烟如

夢晝淹々 奥フカキ殿院ハ各別涼レク奇兼ニレテ塵埃モ消散レテ暑ケ気ハ盛リヲ忘ルヽ軽風似與荷花約為送香来自捲簾ヨ

花ト兼約アリテ花くト吹風ハ南ノ花ト送リテ自ラ簾ヲ捲ノ白ヒヲ吹クヤウニクタメニ吹クヤウニオモハルヽトナリ

夏月

夏の霜とも云ふ　新古今　頼政

庭の面はまさかいろわふ夕さちの
そらこそなけるくすのする月の邪

夫木　為相

給出し湾山の本れる雲りあひて
うををそくあり月の庭の邪

千五百番哥合　後京極摂政

鶏の雲れうけうしかくやみさ
まつのこゝろる山ろの月

夫木　河上夏月　定家

たゞ秋てこと夜川のうれさを
えあへとあるる夜れ月の年

家集　夏夜暁月　仲正

かりそあれ夕すこそあるうたく秋よ
ゆてあり明の月紙月るうる

詞　月もかうふく。秋ともまさこゆて
あり〜の明るやるさ。神小涼き樣
れ戸そ〜ぬ。ワ来ま。涼〜ぬ。ぬ〜ぬ
ゐる〜。秋れかり〜。夜ゆすし。岩ま紙
清み。雲のろこ。ぬくるさ夜ま。極
き明ま。夜ふすしく。夢涼き。明

安さ。月る秋もるさ。ホれ月もこを。
夕すぐみ。光りすぐ〜く。

連　夜くこれ光れすし。月夜　昌叱

俳　夏月蚊こそ。ずれて五百友　其角

明つやとろ夜夜夜月　芭蕉

狂　ア〜の夜の月ま。ゆ也む色墨ふ
うやまくも砂月うる　素絹

○夏の月いとでしきりげを哥ふも
よむ事ハ八月のかげを霜の見
たて夏の霜とも云　詩　白樂天

月照平砂夏夜霜　出詩朗詠集

詩　唐詩選　白

氷前看月光疑是地上霜

詩礎

七字對句

涼月照枕　欹窓倦　水偏清
ヒウケツテラシメ　クヌフレヲヤスルニドノツキ　ミツアマネキヨシ

澄泉繞石　泛觴遲　松下涼
テウセンメグラシテイシヲ　ウカベシヤウヲチスヒ　シヤウカスヒシ

山徑晚雲　収獵網　足涼風
サンケイバンウンオサメリヤウモウヲ　クレカタトウレガカヘニ　タルレウフウ

水門涼月・挂漁竿（スイモンリヤウゲツ・カケギヨカンヲ　月ミヅツリサホニウツル）

夏暁（ナツノアカツキ）

（ア）夜の明ることいとう　定家
續後撰
明るかとゆふつゝ夢のさめぬるかとおのれの身にも似ぬ秋来ぬるかな

夏朝　夜明てもとゝ明て後も云

（ア）玉葉　雅有
五月ふる花はゝの雲いかばかりとへて
あくるをあるる時をしたゝる

夫木　夏朝　為家
夏とあさゝ雲をとしいろくもゝ
ゝさゝ浮しさねあけの庵

夏夕（夏暮）

（ア）玉吟　俊頼
松ぐもぶ夕涼ゝする
浦人の心も夏ぬるゝ
（俳）蚊いぶしせいかぬ夏ぬる夕ゝ道す

夏夜　夜の涼

（ア）夫木　入道摂政
夏の池の汀ゝすゝ
かゝり火の光も涼しゝ夕やみのを
六百番哥合　後京極摂政
うゝねの夏ゝ一声ゝ明ぬゝ
山ゝくゝ

同　夏夜短　定家
夜のよいゝゝ
むゝゝ

（詞）老ても涼しゝ。夏をかくすれい。庵のゝくゝ火。蚊をう火。風涼しゝ。ゝを
ら〻極も裏ゝ。ゝ。ゝ。
月もゝゝる。蚊の声。虫よりは

（俳）夜ゝ秋い極ゝに極ゝの起ゝり其角
ゝ夜ゝ秋いゝゝ秋の極一秋
蚊ゝ秋ハゝ秋の至極ゝ一晶

（詩）夏夜五字對句

簟涼清露・夜（テンリヤウセイロノヨ）　山露侵衣潤（サンロオカシテイヲウルホフ）
琴響碧天秋（キンキヤウヘキテンノアキ）　江風捲簟涼（コウフウマキテテンヲスズシ）
クモナキノヲコトヒク　カセヒルモノヲフキ上ル

詩　夏夜七字對句　詩礎

池邊・命海・鱗風・月　襄翠・幃

浦・回・船・惜芰荷　水亭・閑

詩　夏夜之詞　明　揚慎

湘水魚鱗・冷・章文博山炉

篆罷鑪・薰　魚ノオドルナシキヲ　スコシモモノニテミル香

炉ノクラリモキエテスシイ　開・牖・對・影・延新月

坐愛金波・洗　月ニ對シテ涼気ヲ

オボヘヒヤヘカナル波モ日デリ雲ヲ　アラヒサマスカトオモハルヽト

夏山

あ　亀山百首　子雄

夏山のまきをさ苔ふてう紅葉むくさん

連　夏ふ出て浮世思ん深山うち　絶色

俳　夏山やかり紅葉むけるものこころくい　島山惠

花は散りむけるる夏山のはる車　鬼貫

詩　夏山五字對句

山・樹・含・斜・日　秀・木・溯・秀・色

池・風・浸・早・涼　奇・峯・出・奇・雲

詩　同七字對句　詩礎

幽・谿・鹿・過・苔・還・靜　夏・雲・端

深・樹・雲・来・鳥不・知　冷・溪・山

夏野

あ　亀山殿　為尹

夏の野やまぐ人も仕命ぐろん夏

詞　夏のむ咲名。文月夏。蛍。夏草。

とこ夏。紀涼。夏涼。風涼。姫ゆり

俳　夏川の笛と夏草小一井

連　渉ろ夏草小　紹巴

夏川

あ　新古今

涼しさは秋やまさいて初瀬川

ろろ川夏への秋の下草　有家

(俳)月花や梅ばつ〻れ柔川　夏菴
夏川の青に白かる本芳ふ　重五

△暑ー△涼ー　暑氣　涼

六月ニ限る

ゆくも来もあつさ〻つゝ夏三
月なりさるべくしーしーとゝるも

又同ー事ありー涼ー哥連
俳ハ六月の部ニ三丁目ニ出ス

夏草木

此部ハ夏三月ニ
ゆくるゆさ木と記ス

夏草

(哥)新百合　藤原元真
△夏草　哀れかぶいたりうる
玉鉾のみちのくへ人もむとぶ身りて
(詞)あるる。あびを。けりる。姫
かた山ふ人の往来。谷ばげ来野
茅のそふ。鶯ぜるが鹿ふ。茅むら。
分迷人鹿ふるる。ふ〻ふ。ぞる
(俳)茅。ちげる蓬。葛の藤。泛留。
螢ちげ〻ふ〻ぐ風吹ふ多。雨
夏草の雨とさ
〻ー〻ふ　作　柱子　笑ましかる　姫百

合日上虫ひれとみき里人結ぶまま
(連)武蔵野の夏草と民の茅葺ふ宗因
(俳)夏草やかつ〻ル外と妙の古狐　厂宕
夏草ふるとやゆ〻れ樣のそ　思貫

夏木

△夏木立△若葉紅葉。結
若葉　△嫩葉　むーのし
てゆくゆゆくゆとゆ〻ー　夏ー〻ハ四ノ
北五丁メ出

(哥)玉葉集　院

ゆ〻て指ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
松のゆ〻せも別ゆ〻ゆ〻

(俳)菱摘ゆ結ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻
盃松の移りのあし　夏木

(詩)夏木五字對句

拂曙　携清賞　緑樹　溪邊　合
披雲　坐緑陰　清山　郭外　斜

(詩)仝七字對句　詩礎

漢々　水田飛　白鷺
日月昏

陰々夏木囀黄鸝　僧院深

斜陽映閣山當水　樹松雲

微緑含風樹滿天　水殿開

詩　夏木之詞　唐　王昌齢

緑樹重陰蓋四隣　青苔日厚

自無塵　夏木立クロミシゲリテ

頭箕踞長松下　白眼看他世上

人心　合タ人ノ外ハ交ラズ松ノ下ニ我ヲ三居ブ

夏柳　△葉柳　俳　かひとられ袖ひろまや久柳　秋夕

榊　△榊　榊　万葉集ニ佐宮木花とあり

歌　新勅　神山の榊をかも寒ゆりはく　重政

[illegible]

俳　榊　紅葉ハ出盛ひ[illegible]

青椒　△椒　邑椒　蜀椒　○但州朝倉谷より出るもの

甚美なり丹波丹後か其枝を[illegible]今丹波の朝倉と稱と又奥州津軽の産大にて氣味勝れり

山椒ふしぜんの時の妙術　灰を[illegible]

俳　朝倉や木の丸つぶの青山椒　慶友

柚山椒　所々稀にあり枝葉相似て香氣柚橘の類

か似ようの実長ハのえて丸かゝず　山屋椒　葉大キ

細花その[illegible]実ハ緑豆[illegible]味美なり

春葱　初生鉢の[illegible]酢醬に和して生にて食ふ　刈葱

馬歯莧。醫鵲草。醬杉草。金非廩。和名ままな

俳 たしなきこゝろの人妹うり馬莧一丁左

妙術 ところ考え沈家の軒に掛置るれば馬虫其家に入ずといふ

苔草。地膚

へとろ〳〵人

路。数冬。花い春さく〳〵

七月に花さく

蓼。七種あり。紫。赤。青。香。馬。水。木蓼あり 播州津田穂蓼と出て年中穂あり

藜。苗と

あかりのごとくにて〳〵ふとく茎の成長一つゝりのごとく杖とす

根芋 和名いもがら一云いり。煮て喰ふ剥皮乾ても可

蓴菜 嫩茎未だ葉あらざる物と稚蓴といひ稍のび長どる者を絲蓴といひ秋まいて花さくものを葵蓴と名づく

海松。水松 状ち松のごとく食用す

(三) 素性法師の歌に風かよふ沈るのよるく深あのやれ星定家

連 吹とぬとろふさ深きつ風 肖柏

俳 ふる雪波あらるる螺貝 其角

よの内は海の面ともるめ小立浦

水草の花

連 あをうり水あさも沈の浮沈 宗祇

俳 あるまじきや咲が沈乃 心計

夏生類

此部は夏三月おこる季のつき物とあつむ

蚊 異名 白鳥。暑鬚。○唐土嶺南は蚊子木 有葉冬青の如く実枇杷のごし熟をる時蚊出こゝろ○又塞北は蚊母草あり葉の中に血虫あり此むし化して蚊となるとゝろ

○又江東は蚊母鳥あり蚊と吐と云

俳 ほのあく蚊にもあくさむ焼ぬ鬼貫

蚊を燒や麝蚊遠のさめ云 其用
(註)はをみあるもあるいはくとも生るう
辰かかるにくりやくべき 宗朋

(詩) 蚊之詞　明 陳成

白鳥向炎時営々應苦饑昼ハ
カクレテウヘニ進身因暮夜得志入
ヲクルレムツ
簾帷 夜ハ已カ時ヲ得タリトシ
テイヅクヘモ入リ来ルヅ
噓吸吾方困飛颺汝自嬉吾等ハ汝

清

風一朝至倏忽竟安之 今ニ秋風

フキキタラハスコノ〳〵ト
何処ヘカ忽トイフチリ

蚊遣火 (季)秋 蚊火ともいふ

ゆふ火の煙ふるうことをすぐれ
りのむりしきるるかり那

(詞)彩を作けれ。繽紛。色や。夜か
く。色ふ。ゆゆ。蚊の多もし

うるさきぶせぶ。燒。薄の葛。蚊の
聲遠きぶびく。ぶびくし。星。不
なびく煙

ぶせぶ。ダ白の
(雅)蚊をやかつる方。蚊をやかつる蚊帳

(註)蚊ゆり火い巨燒の内ふ
ぶびくハ河のすぐ。ぶびくハ柳 架柳

蚊柱 蚊の多く集ると云 (雅)蚊
柱ハ蚊の沒落かるく其角

蜻。蜻子。蟆子。山中。(雅)淺蔵の
唐蜻ふ知れてさハかき 白澤

蛭 水蛭ハ水中ふあり草蛭
しつてい草味ふあり

牟蛭といふ者あり狀かぐの乃
ぶ〳〵大きる者一天ふあるぶ

蛍 蚋 (雅)詩 形や船ふ蛍
らぶ蚋ふ〳〵 老蔵

(註)ふの虫もあり
これや大ふれのこの虫る 道明

螢 新蛍。山蛍。流蛍。(異名)丹
鳥。夜光。霄燭。丹良。

夏　生類

暉夜燐。夜半受。燭燿。

㊇ 夫木　知家

井の水の月に風ふかるやそこるん
こほるそこそこんぬるさくのほぬ

室治首　水邊螢　頼氏

くれかけいこのしたくきいたしの
みくさしるつよくふかるふ

家集　海辺螢　清輔

くるる風ふるひくのもるはさゆりそふ
こほるまぬるあいかくるるかけう

夫木　樹下螢　隆祐

ときは河うそひやあきさめくるをみ
くくくくあきるるるもしのうけ

夫木　螢　俊頼

あくちふかくるるかけのあるへそ
たくるいくふのこもくるるくく

家集　螢火乱風　仲正

風ふけいくちあくるるふかあてと
玉のひかつくくよりあるむし

常盤井哥合　螢照細流　仲正

あむしのかを谷河をてふよい
くるるのかいくるこひのゆふ

家集　河辺見螢　好忠

ひかれ水のかもあくふかるくり川
さとあくくれてとぶかくるふ

長久哥合　深河螢　経信

いさり火の流るるとこもとあ
そあくいくくるかくくくり

同　行路螢　経信

行くくれぬはくるすくくあくいる
きくくひやせはくくふるのかを

同　古寺螢　経信

今をもるそのはかりそくくいくや
そくくくくくかくくるくくり

夫木　螢火透簾　寂蓮

あすくくれいふせくくるかむりくく
かりひもりくくかりかくくるる

後拾　沢螢　公雄

乱をるいふくくとるる澤りり
くりる乱くそりくいりかくん

玉葉　叢間螢　左大臣

吹をくるひく流るのあれくふ
こほるぬあやをたくるくん

夫木　江蛍　家長

かくまさんみぬあらし小舟これくる いりえのわたるねぞおもひゆく

夫木　澤蛍　光俊

日くれぬ神の様をゆくやうに さはぐおもひのかゝやきるらん

拾玉　蛍火透簾　慈鎮

わかくともゆふ[illegible]のすだれたけに きえぬおもひのこゝろとりけり

詞 にはてらしひかりもゆる。おもひ飛ぶ。みだれとぶ。きえぬ。きえ[illegible]。ほたる。月 月にきゆる。暁 あけ方は。夕 ゆふぐれにてらしたる。夜 夜涼くもゆる。風 風みだる。うき玉の暑。よひの蛍。夜すがらもゆる。秋をまてもゆる。雲 雲井にわたる。雨 上すてもなべくれ雨にきえぬ。五月雨 露 露はおもひ。草 草にまよふ。本陰。草 ほたるとびかふ。草にすだく。

茅 葉にさそる。おもひあげこれ飛。蛍。

茅萱 茅がやかゝる 水草 うきくさ。こもかる。

ミ川に江のうつくしき。ふくよ。みどりのくさ。

芦 わかばにすゞしく。芦の葉風

こうるゝ。芦葉ずれの音けしき。

尾花 おばなの袖にすがる。なびくおばなの

みだれかゝる 浅茅 あさぢにすだく。

竹 なよ竹の葉風にそよぐ。呉竹の

萩 萩もりかゝる 笹 笹さやぐの葉分の

風にそよぐ。末葉にさそる 玉 玉

ほのかうつる なま立てる 人まなき谷

流るゝ谷の水をてらし 谷川 谷の水をむ

ますぐ野 野辺の露。沢 沢のおもて。夜

海 海辺 海士人のいさり火

かまきりのかげに[illegible] 川 川をつ

柳。 池 池のうき草。玉藻 岩なみの玉

田 浮草。おもてにうつる 芦 芦のを

沢。山沢うつる葉 おもひ芦かる

沼 江の入江にてらし上す おもひの

橋 谷のうき[illegible] いれを

[illegible]

連 [illegible]

俳 [illegible]

[illegible]

詩 螢 五字對句

江海呼窮鳥 トリ ナキワタル

詩書問聚螢 カクモコルヤ

詩 螢 七字對句

詩礎

水調楊巷歌九曲照前流 ミツクツル

江邊螢火入燕巢水上多 川ノウロ

荒簷數蝶懸蛛網弄琴畫 コトヲナト

空屋孤螢入燕巢寄水流 ミヅニウツル

詩 螢火之詞 唐 杜甫

幸因腐草出敢近大陽光

足臨書卷時能點客衣 書ヲ

隨風隔幕小帶雨傍林微

清霜重飄零何處歸霜ノ

[illegible]

詩 螢火之詞 唐 杜甫

幸因腐草出敢近大陽光

足臨書卷時能點客衣 書ヲ

隨風隔幕小帶雨傍林微

清霜重飄零何處歸霜ノ

十月

項ニハイクヘ往

ヤラレヌヅ

詩 仝 唐 李嘉祐

映水光難定凌虛體自輕
水面ニ飛カケソノ光イヅレノ処ニ定メ難ク虛ヲ凌ギ高クトビユクソノ体自然トカロシ

夜風吹不滅秋露洗還明
風フケド螢火ノ燈火ハ滅ヘズ夜露ニアタレド昧カラズ却テ明光ヲ倍ス

向燭仍藏焰投書更有情
火ニムカヘバ光ナケレドモクラカリニテ書ヲヨム二ハ少シタヨリニナルナリ

流亂景來此傍簷楹
影ノ簷ノ乱レ飛フニツフテウツルナリ

詩 仝 唐 鄭谷

故國無心渡海潮老禪方丈倚中條
ナニノコモナク故郷ヲ出テゼンヲ子リテヲル

夜深雨絕松堂靜一點山螢照寂寥
夜アメヤミ禪室ヘテラシクルホタルスントシタヅ

螢故事

螢盛照書
晉ノ車胤ハ博覽多識ニシテ書ヲ讀コヲ好ム家貧シテ常ニ油ヲ得ルコヲ得ズ夏ノ夜螢ヲ集メテ絹ノ嚢ニ入レ盛リテ昏ヲ照シテ讀ケルトナリ

為丸却矢
漢ノ刘子南其方ヲ得テ調合シテ佩ケルニアルトキ虜ト戰フテ圍マレケルトキ矢ノ来ルコ雨ノ如クナリシカ刘子南カ馬ヨリ五六尺バカリニナレバ其矢地ニ墜テ子南ニ中ラズ傷コナカリシ故虜ノ兵モフシギニ思ヒ神ナリトシテカコミヲ解去リシトナリ

螢火丸
一名冠將丸又武威丸トモ名ヅク螢火 鬼笠前羽 蒺藜 各一雄黃 雌黃 各二 羊角 蝦蟆 各二 雞 各二

夏　生類

存ス一両半　燒焦一両半　共ニ未ト為シ雞子黄丹

櫧石火燒二両　鐵鐘柄入鐵處

雄雞ノ冠一具ヲ以テ和シ搗テ千下。丸シテ杏仁ノ如ク三角ニシテ絳嚢ニ五丸ヲ盛テ左ノ臂ニ帶テ從軍腰ノ中ニ繫レハ五兵白刃ヲ辟ク家戸ノ上ニ掛ケラケバ盜賊ヲ辟ク又能ク疾病惡氣百鬼虎狼蜂蠆諸毒ヲ治ス

詞合

江州石山寺ふあり此谷の螢常の螢火よ倍を毎年芒種五月の節此後五日夏至の中の後五日に至り十五日の間を盛りて北へ橋をかざり東へ川をかざりて曾て外ふあらず時節隔たる時へ宇治川よ至る此所へ夏至小暑六月の間を盛りて然る共瀬田の多さふ志らず俗ふ頼政の亡魂化して成と云々

腐

草化成螢　礼記　月令ふ有

法　螢火虫　百科雲母石　二ふ共ふ研り末〻〻是を筆ふ付て何ふても付くと瑞ざれば操るへ〻一次す思ふ画の上よ操るへ〻

又ぬるへハ一月の内日の晩よ光りと覺ゆ年十二次ぬるへハ一年の間光有

子子　蛣　蠟　蟲　釘倒虫

此虫化して蚊となるく

蝸牛　蝸牛　蛞蝓　蝸蠃　蜆蠃　蛞蝓　蝸蠃　蜆蠃　蛞蝓　山蝸　土牛児

名の註　象蟲牛の殼ふへくるる牛。蝸蠃い蛞い貝ふ殼とおくて行心。蜆蝓殼ともゝ名のかくとふてなるゝ。山蝸

い山よあり尺余ふるものあり。蝸蠃も殼ふてとふてれをくゆく躰ふり。蜆蛞蠃いあるくふるひきづりゆくてふ名ふ

[illegible]のごとくあるてゐるり。土牛いきのあるゆゑいとり

㊇ 夫木

寂蓮

牛はてるかぬまるる宿のかくれかり
角あれいとて身をいたのこそ

㊊ 蝸牛角ありなよ沈[illegible]
白露や角ぬ[illegible]
[illegible]

△蛞蝓 附蝸、土蝸、蛞蝓螺、托胎蟲、陵蟲、鼻涕蟲。

○附蝸。土蝸。[illegible]る故。○蛞蝓螺も引つゆくかさ[illegible]ちゆく。○鼻涕虫いとるとうるうの出るといへ。托胎虫。陵蟲いづれも文字の通[illegible]

㊊ 蛞蝓の形象ことなつ数き者 修竹

△夏鷹鳥 夏はたつ鷹[illegible]小鷹[illegible]
[illegible]り雲雀[illegible]に用ひ

△鷹鳥屋籠 羽を替させんなかの鳥屋へ放

ち置く四月堺入の所[illegible]妻一

㊊ 堺入の[illegible]

△鵜 正字詳[illegible]
種あり大[illegible]大小の二
白き冠[illegible]小[illegible]
[illegible]のハ此冠赤[illegible]

△蠅虎 蠅蝗

△蠅 蛆 [illegible]も昏種類多一中に赤頭と忌し淵明の文を見す

㊊ [illegible]

△鵜川 △鵜飼 △鵜舟 △陸鵜

△夜川。漁人鵜ふ魚を取せ未明より下らざる時其のごとせば則ち自ら出を鵜ゆよふ[illegible]れ漁人の手かてゆさぶりを奥を吐く又妙なり濃州岐阜至て妙を得るふ漁人多一一度又十四双を放つものあり

㊇ 新古今

物[illegible]あれぞ[illegible]

前大僧正慈圓

八十うぢ川の夕霧乃そらノ　　寂蓮法師

同

うかひ舟そなたの風さそふらんなほ絶えぬ
絲の上ゆく水のうき火の

光俊

夫木

山川の小夜ふけぬれば桂人
うかひ舟のぼりくだりく

拾遺愚草　雨後鵜川　定家

うかひ舟村雨ぬれぬ夕ぐれの
雲ゐの星乃ぬきとあらそ人

草根　遠近鵜川　慈鎮

宇治川のせゞ出ぬ代木うかひ舟
あはれ〳〵やくるる程のしまく人

詞　夜川　夜川の筏。夜川ろ舟。鵜川。うかひ火。うかひ舟。さーこす。竿。鵜川のさぎ。さぎの雫。筏火。うかひ火。さす。新うかひ。波をやく。うかひ舟。鵜はうかひ。さいぐ。うかひ。かぢく。鵜。鵜飼。鵜飼。夜川。

夜月をいとふ雲。ほのぼの。後。世志〳〵ぬ。鵜舟。夕日。夕日。

俳　鵜の形小筏。荷。

鵜かつまて一里ハ落つる岩の松　其角

右灯鵜数性（清行）鵜舟　全

狂　鵜とはうの字のハ地獄と刻みぶり
呑て見そぬる家ハ極楽　蘭室

青鷺　蒼鷺。和名ことさき。此頃尚甚美え

通鴨　水鳥ハ凡春ハ古巣ヨ
くるゝ其中池中ヨ
残るもあるものあり巣とい
るゝ居るあり

鮎　異名　年魚。細鱗魚。銀口魚。
夫木

あをうを澄れ出つかわかり
乃ろ〳〵流れ　衣笠内大臣

夏　生類

詞　松浦川。字治川。むしゐ川。夏川。もや流。もやき流。沢水江の藻。水車。苔。蘚。

能　二夢の麗る鮎や松浦さ　安成

哀の名をあつ人さ物よ鮎の色一晶

狂　はゝりしそのせとにはあれへ生卵とも又あさらふとも　満水

○食蓼に日ごとの鮎生ト成ル奉鮎ふ秋ハかしころくあ〻ゑ千

鮎故事

梅豆羅國　日本紀神功皇后肥前手島小河ふ鮎を釣るゆゑ其所を梅豆羅国といふ今松浦と云誤

胡時鱈　ぶりの子なり

水鰊　潮まひと用ひ藏内ふ是を切流し清るゝ漬るゝ也いとう即水をその事なり

水鱧　桶ふ水ときへ魚活つゝ大坂より大和へ送るふ大和川を船ふて曳ろるこの故ふ水ふもとゝいろ

干鱧　海鰻。十頭つゝ束らゝ引きるものゝ

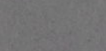
干鰒　能　ねとよ鮑も干されて干豚ゆ　青藍

魚簗　やなとゝ夏ゝ上り下り春秋ゝ春ふ委ゝ

洗鱸　川ふ在るものと佳ふ三四寸とせいゝこいふり

優魚軒ふ作りあらひ浄免教酒ふて食ふ是を流とゞこと云

鰍



處々の谷川ふあり其声五里五里ゝ

鮓　鱠。鮨　名物　江州の鮒。濃州の鰌。和州吉野鰌是と鈎瓶鮓と名つゝ。城州宇治鰬鱎。摂州福島の小鰡もぐめもぐゝとる づゝ。和州今井の鯖。越前引田今庄の鰌。これ等ふる名物のゝ

蟹鰒　塩漬　或ハ酒又糟ニ漬ても可ス

鹽烏賊　異名　繻魚。塩ぢあのいか　千烏賊　ちりめんとつ

夏雜

此部ハ夏三ヶ月の種々の雜事とおつむ

短夜　明安夜　新古今　式内親王

窓ハ竹のえすさん

風の音ハ〳〵　絶さうたに林ハ爰

詞　かくさきす。明安き。池の汀。無火。

夕閑庭。蚊の声。月ぞ〳〵　林

連　ゆふ月ハ　絶ハ　つまこそ　宗牧

俳　みじかの夜や月　花のあ〳〵ハ梅船

蚊帳　蚊屋　衣の家

蚊屋賣

俳　翌の朱ハ　ゆふ　蚊帳ハ　玄流

笠のゆとも　ゆふ

ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ

扇　異名　氷紈。雪雀。回風。招涼。かいあり。風ゑ州。ゆふ州。

新古今　忠岑

夏ハ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ

詞　風ハ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ

連　松風も　ゆふ　扇ハ　宗祇

俳　山風と　ゆふ　扇ハ　実澄

俳　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ

狂　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ　ゆふ

扇五字對句　卜養

詩　掩笑須歌扇　中散詩傳画　迎歌生弄絃　將軍扇賣書

詩　仝七字對句

詩礎

流風入坐飄歌扇　扇影飄
瀑水當階濺舞衣　逐酒来
匂粉時交合歓扇　共徘徊
追抹衣擧石榴裙　涼風前

伏翼　扇ハ作リ出ヒトヤウニ蝙蝠ヲ見テ
ふかいなりうとうの清少納言の枕
草子かきそ〳〵ふ〳〵かさらひしき
の去年のかいやうとかけり
(俳)蝙蝠よりもくらし　沈寞　北枝

團扇　(俳)秋ハ扇ハ寄居のたくそ
うちまふ青玗　十丈
思ひぞ菴のうちまふ　妙那
(礼義ふい拍ふれぬ世)うちまふる
(狂)むりしめ〳〵奉の郭ひ太うらを
きのの上ぬく風をよぐり　湖松

詩　團扇之詞　唐　劉禹錫

團扇復團扇奉君清暑殿行
殿ニテ君ヲ御ヒウ扇ヲ秋風吹庭樹從此
不相見　二ハ木ニ秋ノカゼフクヒウ扇ハ用ヒラレヌ
鶯女蒼々華蟲編明年入懷
袖別是机中練　ホカニヒレヨノウタ
オトキスルトキハ又タクヒニフカレ

日傘　ひさしともよ雨傘の如く油
をぬりて暑を防ぐため風
編笠　菅笠を以てこまをつくる
勢州江州より多く出ッ

結夏　夏籠　夏佛者四月
六日より七月十六日迄一室に
ゐ安居して他行せぬを云尚
四月十六日の処又夏十九丁ず見合医

夏断　夏經　夏花　夏書
夏断　安居　右いつも

も夏ゴまりる内の行状なり夏ゴ
りる内ハ佛ゴ花七供無縁の亡靈ゴ面
向一文聖經の類を書寫ゴ俗家
も夏斷ゴいそ房事酒肉等慎む
者あり△安居といふハ形心靜攝
穢安ゴいふ要期此ゴ住まゴ居ゴ

新麥 早きゴのハ三月ゴ刈ゴ
ゴ穢物ハ五六月の内ゴ也

切麥 △冷麥○天寒の時
△溫飽をゴらひ天
熱の節ハ冷麥ゴ穢りもゴ
制ハ夏ゴ寒溫の違ひゴ

煮冷 △冷汁○夏ハ食物又
ハ汁ゴそも器へ入ゴ
井水ゴ冷ゴ穢ゴ
ゴ食ゴ云

麥飯 狂 ゴ過てゴ佳ゴ
ゴ種ゴ穢ゴ靈

麥粥 俳 拉くの汗を拭く
麥粥ゴ穢ゴ 十七

木布 布のひまゴ
りのをきゴ

單物 △**汗衫** 官家の下
着ゴ
或ハ袖ゴ俗
ふゴ襦袢ゴ

汗巾 △汗拭△汗手拭 汗
ゴ手巾ゴ又
夏の用具ゴ
俳 ゴ澤ゴ汗拭 貞九

必用 此部ハ夏三月の入
用の事ゴ數多ゴ

夏養生 素問云夏三月ゴ蕃秀
ゴ云天地の氣交ゴ萬
物繁茂ゴ夜ゴ卧ゴ早ゴ起志ゴ
怒ゴ事ゴ英花ゴ秀ゴ
天氣ゴ夏氣ゴ養生ゴ道
○水ゴ浴ゴ事ゴ
ゴ石ゴ上ゴ

生ず冷なれば油と生ず○風は黄ず
卧ことあれば脚の病と生ず

夏天氣 日蝕黄なれば雨多き兆
○月は暈あれば多く風を生ず

夏風 夏風は中央吹萬物を長養
する〻○夏は火〻火生土と
土〻生ずる〻土は中央の位方角なと
いへども干支よりしべ戌未のうへ俗ホ
五月西にて西風と雨とするものは時
節の火氣より火生土の土の方へ生て
吹風なるとなし○東風は常は雨なる
ものなれども入梅のほ〻土用は雨なれど
然れども〻スリ〻吹つゞきて風西にうつる雨
なるべし○南風は時の火と對する故雨へ

夏雲 風の方位はまことがひて
こゝも雨とあらべし

夏霞 暮は西の方赤くして
南へ廻るは日和なり秋
ふいてうつて西へうつる兆へまろく

夏部終